



幼少の頃から、榛原と三重県の名張には母親の仕事によくついていった。というより、ついていかざるを得なかった。片親であったから、僕を一人にさせることが不安で仕方なかったと思う。

宇陀市榛原から以東は三重県であり、三重に入ったところが名張である。なので三重県といつても奈良県の隣にある。

ここに住む人たちはたいがい通勤は大阪、買い物もほとんど名張以西であるから、僕には他県という感覚があまりない。

私が通っていた大学は三重にあり、奈良から通学で毎日この名張を通過していく

た。名張に住む友達もでき、お互いの家を行き来していた。名張はすっかり私の中では把握できている、と思っていた。

その名張の友人の父親が亡くなられたときに、告別式に参列させていただいた。大学2年か3年だったか。

そのお葬式で民俗学的に貴重な光景を見ることになる。つまり土葬だ。竹製だったかのカゴにご遺体を収容し、親族が土葬する場所まで行列をなして担いでいくのである。その光景を友人の家の前で見送った。

このように名張は身近な存在であると思い込んでいたのに、実は全然知らなか

ったことを今回のぶらり旅で気付かされた。

ところで、歩くことの効用はいくらでもある。体力がそれとなくついてくる、気分転換にもってこい、暇な時間を有効に使える、それにも増して歩かないと思づかないことに気づく。

自動車、自転車など、様々な便利な移動方法を選択せずに、とりあえず歩く。カメラを持っても持たなくても、一定の距離を歩きさえすれば、新たな発見が待っている。発見があれば、想像力、推理力がはたらく。

名張はそういう町だった。



ぶらりと名張を訪れたのは、お盆前の土曜日。まず最初に、案内板を見るたびに前から訪ねたいと思っていたものの、その機会がこれまでなかった名張藤堂家邸跡。

藤堂高虎は私のような歴史音痴でも知っている武将だが、その養子高吉となると、？？？である。高吉は領地の今治からこの名張に移封されるが、名張の町を発展させるために、今治の商人や職人を招き入れた。そして今回歩いて感じた、現在に残るこの地の文化を形成した。

現存する藤堂家邸はごく一部らしい。

これでごく一部だとすると、全体はどれくらいの延床面積になるのだろう。想像もつかない。

縁側に腰を落とし、庭を向いてカメラを構える。翻って内部も撮影する。あらゆる角度、高さで構える。どのように動こうが、どこを撮影しようが職員から注意を受けることがなかった。

もっとも、受付は自動販売機だし、発券されたチケットを受付に座っている男性に渡しさえすれば良く、現にその男性、チケットのやり取りをする意外はずっと俯いて本を読んでいた。

目の前の本に全身全霊の精神を注入し

ているような雰囲気。あとは定刻になれば、閉めるべきところを閉めて帰るのみだ。

思いつきで家を出たのが、9時半頃で、電車に乗り込み名張には10時半頃についた。そろそろお腹が栄養を欲して



いるので向かう方向を東にとてみた。

昼食は行き当たりで決めるつもりだ。

道路が茶色の舗装された町並みは、こちら辺では大抵古道もしくは古い町並みであることが多い。その茶色の道を見つけたので歩いてみる。

疎水が町並みに沿って流れている。観い

てみるとメダカのような小さな魚が元気よく群れをなして泳いでいた。

登録有形文化財になっている立派な古民家も見かけ、さらに東に向いて数歩歩いたところに「cafe mjuk」さんの看板を見つけた。明らかに古民家をリノベしているっぽい。よしそうにここにしよう！

恐る恐る玄関を入り、なおかつ土間から2枚めの扉を開ける。「予約していないんですけど」と話かけた。というのも、まだ誰も席に座っていない、つまり閑散としていたのだ。それでてっきり予約で席が埋まりきっているのかと思ってしまったのだが、「大丈夫ですよ、どうぞ」と気さくな店員

一の鳥居が見えた。現在地から400mほど南下すると参拝できるが、今回はパスした。



さんが声をかけてくれた。

中は広く、北側の開口が広いので、とても明るい。

入ってすぐにキッチンが見えたのでチラ見すると、結構な人数分のトレイが並べられていたので、これから続々入ってくるのではないかと思った。

僕が一人目の客で一瞬寂しく思えたが、案の定次から次に客が訪れて、あつという間にいっぱいになった。店を出てからも駐車場に止めようとする車があった。逆によく入れたなあと思った。

オーダーしたのは日替わりランチ。今どき950円で食べられるとあって人気に違いない。和風ハンバーグ（豆腐ハンバーグかも）をメインにヘルシーな3種類のおかず、そこに味噌汁と雑穀米が用意されていた。デザートのレモンゼリーは喉通しよくお腹に入つていった。

今度は平目に来て、カウンターでゆっくり本でも読みたいと思った。

ホットコーヒーを追加で頼み、ゆったり飲み干すと、外に出た。いよいよ本格的な散策をするつもりだ。

元来た道を今度は西に戻る。この道はたまたま初瀬街道だったようで、標識が教えてくれた。初瀬街道。私の家も初瀬街道沿いにあるから、この道をまっすぐ行けば我が家に戻ることができるのだろうか。

少し歩くと「伊和新聞社」の建物。どうみても廃刊している雰囲気見え、後にネットで調べると、やはり最近廃刊していた

化に完全に侵食され、少し古い時代のアーリティが目の前から静かに消滅していく寂しさをこの目で感じた。

名張川は奈良県の高見山とその付近を源流とする。土地の勾配に忠実に従い、分流と合流を経て、2つの川が名張を囲むように流れる。住宅街をはずれれば田園地帯が広がる米どころだが、町の人たちにとってもこの川の水は貴重であろう。

水が流れる町は魅力的だ。目と耳、ひょっとすれば鼻で川の流れを感じる生活は、空気を吸うこと等しく、必要な気がする。

さらに西、すなわち大阪方向に歩く。レトロな建物が次第に増えてきた。町屋風の家屋が並ぶ。すでに閉業した銭湯「日之出湯」の看板が見えた。

路地の脇に川が流れ、お風呂上がりの火照った体を、川面の冷気が運んできて、気持ちよく進んだのではないだろうか。

もっと初瀬街道を西に進むと、「ぐいち」な交差点があり、そこには宇流富志禪（うるふしね）神社の

